様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　6 月 19 日現在

機関番号：14601
研究種目：基盤研究（ｃ）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520190
研究課題名（和文）　呪的音声表現の諸相についての基礎的研究

研究課題名（英文）　A Study on the Magical Oral Expression

研究代表者
永池　健二　（NAGAIKE KENJI）
奈良教育大学・教育学部・教授
研究者番号：60237493

研究成果の概要（和文）：全国各地の神楽や民俗芸能を広く調査し、呪的音声表現に関する豊富な文字・映像・音声の資料を収集。その資料の比較・検討によって、歌謡のハヤシコトバやカケゴエ、アイヅチなどの音声表現をＳ音系、Ｔ音系、Ｈ音系などの音声系統の種別によって分類し、その系譜と特質を歴史的に明らかにする見通しが確かなものとなった。私たちの身近でよく耳にするオット・オットットという音声の呪的性格とその系譜を明らかにし、神楽における「立歌」の存在について、その性格と歴史的意義について初めて明らかにした。

研究成果の概要（英文）：I will investigate Kagura and folk performing arts widely across the country, were collected extensive video and audio material for an audio representation curse. And I, by weighing the material that was classified by the type of sound system ,such as sound system S, T, H, such as the representation and voice shout “Kake-goe” ,meaningless words “Hayashi-kotoba” in a song for rhythm, and the appropriate words “Aizuchi”. As a result, we are expecting that to clarify its genealogy and historical qualities. I also, to clarify the lineage and its nature curse of voice that “Otto”・”Ottotto” often hear is close to us, for the presence of "Tachi-uta" in Kagura, apparently for the first time about the historical significance and its character was.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：国文学・民俗学・歌謡・トナエゴト・呪的音声・神楽・カタリ・ハヤシコトバ

１．研究開始当初の背景

歌謡に不可欠のハヤシコトバ、共同の力仕事や祭礼の御神幸などにつきものの意味不明の掛け声やハヤシ、神霊に祈りをささげる際に発するトナエゴトなどの呪祷の文句、人に呼び掛けたり答えたりする際の応答やアイヅチの言葉。こうした音とも言葉ともつかない独特の音声は、今日でも私たちの身の回りに日々生起し、独特の力を発揮しているが、これまで文学の領域についてはもちろん、口承文芸や民俗学の分野においても、ほとんど

顧みられることなく、科学的な研究の外側に放置されたまま、打ち捨てられてきた。

例えば、ササ、サッサ、サンサ、サーサーなどサ音を重ねて強調する音声は、日本の歌謡のハヤシコトバに最も多くみられる代表的な音声であるが、それと同様のサ音を主体とする音声表現は、南島の祭儀における呪祷の詞章の中に繰り返し登場し、また、私たちの日常の言語生活の中にも独特の威力を持ってなお繰り返し発唱されている。

こうしたサ音の呪的な力については、早く高橋正秀に「サ音考」(「神楽と神楽歌序説」所収『六歌仙前後』昭和 19 年 5 月、青磁社)と題する先駆的な業績があるが、その問題提起はほとんど受け継がれることなく、研究も停滞したままである。

一方、これまでの叙事歌謡を軸とする古代歌謡の研究においては、歌謡の発生論は、常にことばの存在を前提として積み重ねられてきた。歌謡は、神事の中で「神の言葉」として成立してきたために「神の言葉」であることを「装う」ために韻律が必要であったとする見解(古橋信孝「歌の呪性と語りの呪性」『古代和歌の発生』東京大学出版会、1988 年)などがその代表的なものであろう。しかし、こうした人の言葉の存在を前提とした所論では、歌謡の担っている音そのものの呪性はその視野から切り落とされ、ハヤシコトバなど意味不明の音だけに頼った音声表現の特質や威力はその射程の内から欠落してしまう。歌の初源に立ち返ってその言語表現としての特質を明らかにするためには、ことばの成立以前をも視野に入れ、音とことばの中間にあってさまざまな表現の位相を獲得している境界的な言語表現の組織的・体系的研究が不可欠なのである。

２．研究の目的

本研究は、こうした状況を踏まえ、歌謡のハヤシコトバからトナエゴト・カケゴエ・アイヅチなどの、これまで顧みられることのなかった、音とも言葉ともつかない境界的な音声表現に科学的研究の光を当て、その研究を組織的かつ効果的に進めていくための、基礎的な資料の収集と整理を計画的に遂行することによって、音声表現や言語表現の研究、歌謡の研究にあらたな地平を切り開こうと企図したものである。

３．研究の方法

多岐にわたる呪的音声表現の研究を効果的に進めてゆくためには、文字・音声・映像の三種の媒体を相互に関連させながら、正確で詳細な資料を収集し、活用可能な形に整理して保存してゆく作業が不可欠である。そこで、本研究では当初の研究計画に従い、次の三項目にわたって計画的に研究作業を進めた。

（１）すでに公刊された文字による資料の収集とその整理

まだ、資料の収集が進んでいない地域の公立図書館等を訪問し、直接関連資料の収集に努めたほか、神楽・民俗芸能等の調査の折を利用して、当該地方における呪的音声資料の収集をはかった。

（２）現存する祭礼・神事における呪的な音声表現・言語表現の事例の音声と映像による記録・収集とその整理。

注目すべき音声表現を含んでいる神楽等の神事芸能を、重点的に現地調査をして、正確な音声映像の記録を作成するとともに、現地の教育委員会や図書館の協力の下に、現地調査のかなわなかった事例も含めて、貴重な古い映像資料などを収集した。

（３）収集した文字・音声・映像資料の分類整理と保存、そのデーターベース化のための基礎作業。

収集した音声・映像資料は種別に分類整理して、保存、活用しやすいような形での資料化を試みた。文字資料も整理して、音声・映像資料と連動させて、活用できるような総合的な利用法を追究した。

以上の研究調査の遂行にあたっては、かぎられた時間で効率的に研究調査を推し進めてゆくため、専門の民俗学研究者１名、および研究代表者のもとで研究を続けている大学院生 2 名の協力と補佐を得て、計画的かつ組織的に研究を進めた。

４．研究成果

以上のような研究の目的と研究方法に則り推進した研究調査の成果は、おおよそ次のようなものである。

（１）研究調査の具体的達成。

①すでに公刊された文字による資料の収集とその整理。

高知県の土佐神楽、宮崎県諸塚村の戸下神楽、島根県隠岐島の島前・島後神楽など、下に挙げた各地の現地調査において、神楽歌本など呪的音声に関わる文献資料を多数収集

したほか、次のような資料の補足調査を実施して、文献資料の収集に努めた。

・宮城県立図書館の文献調査（平成 22 年 3 月）
・福島県立図書館の文献調査（平成 22 年 3 月）
・三重県鳥羽市立図書館の文献調査（平成 23 年 8 月）
・岐阜県立図書館の文献調査(平成 23 年 9 月）

②現存する祭礼・神事における呪的な音声表現・言語表現の事例の音声と映像による記録・収集とその整理。

神事として古態を残し、かつ呪的な音声表現を様々な形でともなっている全国の祭礼、神事や民俗芸能を実地に調査し、音声と映像による正確な記録の作成に努めた。三年間の研究期間に実施した主要な現地調査は次の通りである。

平成 21 年
・8 月 14 日～16 日 福島県いわき市　じゃんがら踊り
・11 月 21 日～23 日 高知県　本川神楽・名野川磐門神楽・池川神楽
・12 月 31 日～1 月 1 日 愛知県伊良湖町・日値賀島の現地調査
平成 22 年
・1 月 30 日～2 月 1 日 宮崎県諸塚村　戸下神楽
・7 月 17 日～19 日 愛知県伊良湖町・三重県鳥羽市神島の現地調査
・8 月 13 日～17 日 島根県隠岐島島後・西村の神楽と盆踊り、島前・浦郷の盆踊り、シャーラ船
・12 月 31 日～1 月 2 日 三重県鳥羽市答志島、神島の現地調査
平成 23 年
・4 月 3 日 兵庫県姫路市御津町・賀茂神社の小五月祭
・7 月 21 日～26 日 島根県隠岐島島前・海神社の祭礼と神楽、島後・久見の祭礼と神楽
・8 月 20 日 奈良県十津川村　太鼓踊り
・10 月 8 日～9 日 奈良県奈良市奈良豆比古神社の翁舞と相撲神事
・10 月 10 日 奈良県田原本町村屋坐弥冨都比売神社の祭礼と神楽
・12 月 2 日～5 日 島根県隠岐島島後・久見町の客祭り

また、高知県いの町教育委員会本川支所、同池川町教育委員会、島根県隠岐の島町教育委員会、同西ノ島町教育委員会、宮崎県諸塚村教育委員会、三重県鳥羽市教育委員会等の協力を得て、本川神楽・池川神楽・隠岐西村神楽・久見神楽・客祭・神島ゲーター祭などの学術的な価値の高い映像資料を多数取得、収集した。

③収集した文字・音声・映像資料の分類整理と保存、そのデーターベース化のための基礎作業。

実地調査において作成した音声・映像資料および現地の教育委員会や図書館の協力によって収集した映像資料は、すべてデジタル化し、種類別に分類整理して、活用可能な形で保存した。
そのうえで実験的な試みとして、テーマ別に同類の音声表現を抽出して配列し、視聴者に提示する次のような 2 種の映像資料を作成した。

・「祭礼の中の呪的音声」
　祭礼の中で発声されるホット・オット・トウト・オーオーなどの呪的な音声の場面を抽出し、その場面や働きが明確に分かるような形に配列して提示したもの。
・「立歌」
　神楽や民俗芸能において、その神事の最初の場面や舞や踊りの各演目の最初にうたわれる「立歌」と呼ばれる特殊な歌について収集した数多くの映像資料を分類・配列して、その場の特質や歌の呪的な性格が明確に見てとれるように提示したもの。

（２）収集された文字・映像・音声資料の活用によって達成された研究成果と今後の展望。

①呪的音声表現資料の豊富な収集によって、当初の企図の通り、歌謡のハヤシコトバからトナエゴトなどの呪詞、カケゴエ・アイヅチの文句など、これまで相互に関連のない別種の音声と考えられていた諸種の呪的な音声表現を相互に関連付けながら総合的に把握し、体系的に研究を推進してゆく視座と方法とを具体的に示すことが可能となった。

②呪的音声表現をその音声表現の種別によってＳ音系、T 音系、H 音系などに分類し、それぞれの音声表現の系譜と特質とを歴史的な展開として跡付けてゆく明確な見通しを獲得した。

③上記の①、②の達成を踏まえて、具体的研究の展開としてすでに次のような二種の

テーマでの講演を実施し、その成果を公表した。

・「おっとっと考―ふしぎな音のふしぎな力―」
平成 23 年 11 月 12 日、國學院大学オープンセミナー講演
・「立歌考―白拍子から椎葉神楽・土佐神楽・山形番楽まで―」
平成 24 年 5 月 19 日、日本歌謡学会平成 24 年度春季大会公開講演

前者は、オットあるいはオットットという今も私たちの身近でよく耳にし口にするふしぎな音声表現の由来について、それを、歌のハヤシコトバや呪詞、アイヅチの言葉に共通してみられる、オット、ホット、アット、トントといったＴ音系の多様な音声表現の中に位置づけ、その呪的な性格を指摘したうえで、その系譜を歴史的に跡づけた。種子島正月の船始めの「オットー」の音声の応酬や、椎葉･嶽の枝尾神楽「宿借」神事の「ホット」、昔話の語り始めや語り納めの「トントムカシ」や「ドンドハライ」、話中のアイヅチの言葉「ハット」「ヘント」「ホット」「オット」といった音声や、伊勢神島ゲーター祭の豆まきやモロモ配りにおける「オットめでたい」などの多様な音声表現と関連付け、総合的に比較検討することによって、「オットット」の音声もまた、ハヤシコトバの「トンド」「トウトウ」や南島の「ハートウト」「ウートウト」などの神拝の呪詞と同様に、もとは、「アナトウト（あな尊と）」という、神に対する敬虔な呪祷の文句に由来することを明らかにした。

後者は、各地の神楽の開始にあたって、その冒頭において、またそれぞれの舞や踊りの開始に当たってきまって歌われる「立歌」と呼ばれる特殊な歌の存在に初めて注目し、その多様な実例を具体的に示して、古代から現代へと纏綿として続いている呪的な歌の唱謡の一形式を跡付けたもの。宮崎県椎葉村十根川神楽や隣村の諸塚村戸下神楽には、「立歌」と呼ばれる独特の歌が伝承されているが、遠く離れた高知県いの町の本川神楽にも、また同様の「立歌」が伝承されている。どちらも、神楽全体のはじまりにあたって、まず歌われるべき「立歌」と、それぞれの神楽の舞の各曲のはじまりごとに座して控える舞手に対して、立って舞うことを促す「立歌」の 2 種があることで共通している。前者の「立歌」には、神楽の場を清め、それにふさわしい聖なる場を設定する呪的な働きが認められ、後者には舞手に対して立って舞を始めることを促す働きが認められる。そして興味深いことに、同様の働きをする歌謡の事例は、山形県遊佐町の杉沢ひやまの番楽の「カケウタ」や、隠岐島前・島後の「寄せ楽」など、各地の神楽にも数多く認められ、さらに、その淵源は、三段構成をもつ古代の東遊や白拍子の芸能にも見て取ることができるのである。

上記 2 回の公開講演に際しては､それぞれ、収集した具体的実例を映す映像資料を効果的に抽出・配列して編集した前掲のごとき映像資料 2 種を作成し、上映して会場から大きな反響を得た。

なお、こうした研究成果の一部は、昨年公刊した拙著『逸脱の唱声　歌謡の精神史』(平成 23 年 9 月、梟社）にも盛り込み、大きな評価と反響を得て、平成 23 年度日本歌謡学会志田延義賞を受賞した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）
①永池健二、佐々木聖佳、植木朝子、田中寛子、西川学、松石江梨香、内田源、梁塵秘抄選釈（第四回）巻第二四句神歌神分編（四）『奈良教育大学国文―研究と教育―』､35 号、pp. 53-106、2012-3、査読有、
②永池健二、佐々木聖佳、植木朝子、田中寛子、佐藤幸代、内田源、梁塵秘抄選釈（第三回）巻第二四句神歌神分編（三）『奈良教育大学国文―研究と教育―』､34 号､pp. 13-52、2011-3、査読有、
③永池健二､開かれた〈野〉の学―遠野物語・郷土研究・一国民俗学―、『季刊東北学』第 23 号、pp. 9-21、2010-4、査読無、
④永池健二、佐々木聖佳、松石江梨香、梁塵秘抄選釈（第二回）巻第二四句神歌神分編（二）『奈良教育大学国文―研究と教育―』、33 号、pp. 25-47、2010-3、査読有、
⑤永池健二、ウタとカタリのあいだ､『口承文芸研究』33 号、pp. 123-128、2010-3、査読有、
⑥永池健二､〈日本〉という命題―柳田国男・「一国民俗学」の射程―、柳田国男研究会編『柳田国男・主題としての日本』、pp9-41、2009-10、査読無、

〔学会発表〕（計 1 件）
①永池健二、日本と韓国における歌謡と民俗の比較研究の方向性、国際シンポジウム「東アジアにおける農耕文化とウタ」（於：関西外国語大学)、2009-8、

〔図書〕（計 2 件）
①永池健二、梟社、逸脱の唱声　歌謡の精神史、2011、356
②永池健二、梟社、柳田国男　物語作者の肖像、2010、322

６．研究組織

(1)研究代表者

永池　健二（NAGAIKE KENJI）

奈良教育大学・教育学部・教授

研究者番号：60237493

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：